

自然と共生できる暮らしのある社会

ながれ

河津 恵鈴 (かわづ えりん / 会社員、東京都在住)

今、私たちは「決定的 10 年」と言われている時期にいる。最近、気候変動分野では、アメリカの温室効果ガス (GHG) 排出量が、昨年は 1.9% 減少した¹ ことなど、良いニュースも耳にする。しかし、昨年公開された各国の気候変動に対する取組を評価するグローバル・ストックテイクによれば、気温上昇を 1.5°C に抑えるためには、さらなる野心的な取組が求められている。今年にでも 1.5°C まで上昇すると訴えている科学者もおり²、このような記事を読むと絶望的になる自分がいる。生物多様性損失やプラスチックごみ問題も、地域レベルでは様々な取組が実施され、一般的にも少しずつ認知度が高まっているが、これらの、グローバルで多様なアクターが関わる課題に対処することの難しさを感じてしまう。なぜ、環境関連の報道が近年多くなったにもかかわらず、私たちは破壊し続けてしまうのだろうか。

持続不可能な社会経済システムの中では、破壊は止まらない。全く意識しなければ、電力は主に化石燃料をベースとしたものが供給され、公共交通機関のアクセスが悪い地域では自動車で移動することが当たり前だ。日常用品を使い終わった時に、色々な資源が混ざっていることから分別に苦労し、地域によってその資源は再利用されることなく燃やされ、汚染物質や GHG として大気に残る。こうしたことがシステムにすでに組み込まれているため、普通に生活しているだけで無意識に環境破壊をしてしまう。

環境に配慮した行動をしたくても、社会経済システムが選択肢を制限している上、どの選択肢が適切なのかわかりにくい場合が多

い。例えば、お店でマイバッグを持参することでポリ袋の消費を減らす動きが主流化しているが、この取組により廃棄物やプラスチック生産による GHG 排出量がどれくらい減ったのか？マイバッグの生産による環境負荷をポリ袋より低くするために何回使わなくてはならないのか？そのような疑問が湧いてくる。ライフサイクルアセスメントで検証しなければならないが、簡単に実施できるものではなく、試算は条件にも左右されるだろう。システムの複雑さが、混乱を招き、適切な判断ができない状況やグリーンウォッシング (見せかけの行動) をしやすい環境を作っているのかもしれない。

また、環境政策の価値は一般的に感じにくい特徴がある。なぜならば、目に見える害がないことが評価判断になる場合が多いからだ。そういう意味では、特にコロナ前の公衆衛生の社会的扱いに似ている。例えば、公衆衛生に関する政策やシステムが機能している場合は、パンデミックや医療崩壊などの緊急事態がなく、安心して生活できる。環境分野でも、きれいな大気や安全な水は、社会のあらゆるシステムや仕組みにより成り立っている。防災も、適切な対策を取れていれば、いざという時には被害を最小限にできる。つまり、「何も起きていない」状態がベストだ。安全安心な社会を造っていくためには、強靱なシステムとそれを支える様々な資源が必要だが、何も起きていない時は、その仕組みの重要性が分かりづらい。見えない努力は「当たり前」、あるいは「不必要」になってしまい、評価されにくく、支持や理解を得ることが困難になる。そして社会的な優先順位が下がり、緊急

性を感じないから必要な資金や人手が集まらず、結果的に悪事のリスクが徐々に上がってしまう。しかしこの状況が危機的になった際に、「当たり前」だと思っていたものが脅かされると、この状況が「問題」として認識され、必要性を改めて痛感するサイクルができていく。見えにくいと後手後手になってしまう。

この根本にあるのは、社会の潜在的な考え方と優先順位なのかもしれない。現代社会では、どうしても環境は「自由に使えるリソース」という考え方が根強い。実際には目には見えにくい自然の恵み（生態系サービス）があるからこそ私たちの生活が成り立っているのだが、損得勘定のみで環境について考えると、利益を生み出すものはどんどん使っていくインセンティブが生まれる一方、「有用性」を感じないものを保全するインセンティブが減ってしまう。このような考え方は、私が女性として意識している「女性管理職を増やせば、イノベーションが活性化され、儲かる」³などの多様性に関する論点にも似ている。様々な考え方やバックグラウンドを持つ人々の活躍や多様性を重要視するよりも、最終的には儲かるから（あるいは損害を最小限にできるから）取り組むことを示しているように思える。同様に環境の「価値」や環境リスクを数値化し始めたことで優先順位が上がり、行動につながったことは良いことかもしれないが、個人的にはやや危険な考え方だと感じている。経済の「言語」で伝えなければ、大切さは伝わらないのだろうか？意思決定の時点で経済効果がないと感じられた場合、価値がないと判断されるのだろうか？さほど儲からなくなれば、見捨てられるのだろうか？そんな懸念もわいてくる。しかし現実には、社会で浸透している考え方や、かつて最優先にし続けてきたことが今のシステムの基盤になり、そのシステムが既存の価値観を永続させている。

問題は、この持続不可能なサイクルからどう抜け出すのか、だと思う。

個々に環境を配慮した行動をとるのも立派だと思うが、社会経済システムを変えなければ、常に流れに逆らうことになると思う。持続不可能なシステムの中で、持続可能な生活を送るのはとても難しい。しかし、あらかじめ設定されている標準の選択肢が持続可能なものになれば、何かする度に悩むことなく、自然と共生しやすい状態になるだろう。最も楽で合理的な選択肢が持続可能なものになっていれば、大半の人々はおのずと取り入れてくれるだろう。そのためには、やはり構造的なシフトが鍵だと思う。例えば、都市のスプロール化に対処するためにコンパクトシティの要素を導入し、生活に不可欠なサービスや商品を提供する店舗だけでなく、公園などの緑地が身近にあるような「歩きやすい街」を実現できていれば、人々の選択は大きく変わるだろう。自動車よりもライトレールや巡回バス、徒歩や自転車での移動の方が楽になる。きれいな空気を吸いながら、景色を見ながら散歩することも気持ちよく、楽しくなる。そうすれば、インフラからの様々な環境負荷が軽減されるだけでなく、住民のメンタルヘルスを含む健康も向上することが期待できる。日常的に自然環境に触れることで、その街に住む人々の環境への意識も高まるかもしれない。その街を支えているシステムの価値を再発見するかもしれない。大切にしたい、次世代に残したいと心から思うかもしれない。街が変わることで、持続可能性の流れができ、住む人の気持ちや行動が変わる。

いつかそのような街で、普通に暮らしながら自然と共生できる社会を感じてみたい。

¹ <https://www.nytimes.com/2024/01/10/climate/us-carbon-emissions-2023-climate.html>

² <https://www.theguardian.com/environment/2024/jan/08/global-temperature-over-1-5-c-climate-change>

³ <https://www.forbes.com/sites/forbesbusinesscouncil/2023/02/07/why-everyone-wins-with-more-women-in-leadership/?sh=a30167d3cdd>